

2022年2月27日(日)

老球の細道658号

2月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

股関節の痛みがなくなったと思ったら右肘が伸びなくなった。それが良くなったと思ったらまた血圧が高くなり始めた。会長だけ完璧に快調はないようである。コロナ下で問題を残しながらも北京五輪が終了したと思ったら今度はウクライナ問題である。社会も世界も平穏無事はない。グローバルな世の中、世界のどこかであったことは「風が吹けば桶屋がもうかる」が如くスポーツや日常生活にもいづれ何らかの影響を及ぼすであろう。

いつもより3日間少ない2月、周りに振り回されながら、あっという間に終了した。

1・読書から

◆「偉人は大衆が彼に貸したものを百倍にして返す」〈『人類の知的遺産57:デュルケム』講談社〉:孫娘が「野口英世」の伝記漫画を読んでいた。英世は色々な人から借金を踏み倒して「ひでーよ!」とさげすまされても、後に医学の功績によって世界中の人の命と健康に貢献した。私は今でも野口英世の物凄い努力を敬愛する。努力こそが天才、偉人を創る。

◆「後悔は言い訳を残すが、反省は教訓を残す」〈青春と読書:スラムダンク奨学生インタビュー〉:読書を薦める小冊子にスラムダンク奨学生のインタビュー記事が掲載されているとは夢にも思わなかった。無名の高校生がアメリカで経験した挫折と希望のストーリーが満載。言い訳は自分を貶め、何も残さないが、教訓は次の成功への足掛かりになるだろう。

2・新聞、パンフレット等から

◆「ほな」〈朝日:折々のことば・田辺聖子〉:別れは避けられない。人生最後の別れの一言として最上の言葉だと作家は言う。以前勤めた学校の離任式で「じゃあな!」の一言で挨拶を終えた先生がいた。余計なことは言わなくても毎日を濃密に過ごしたのだろう。

◆「いちばん必要なのは“わかっている”人ではなくて、現役でやっている人、つまり今でも“わかろうとしている人”です」〈朝日:折々のことば・五味太郎〉:バスケット界でも「わかった」気である人が多いが、私は「わかった」という境地に立てない。だから今でも毎週「ココス」でコーチ勉強会をしている。共に考えてくれる仲間がいることで前進できる。

◆「札幌五輪から50年。ジャネット・リン・・・妖精。カミラ・ワリエワ・・・陽性」〈朝日:かたえくぼ〉:スポーツ文化の発達には批判精神が欠かせない。批判するためには決めつけの刃で鬼をやっつける厳しさだけではなくユーモアが必要である。矛盾、不合理に対してやんわりと。マーク・トゥエーン曰はく「すべてのユーモアの源泉は哀愁である」。

◆「もっと速くなりたいという気持ちをかえすのに、何か一つに絞る方が遠回りになる感覚があった。全部やるのが、自分には一番いい手段だと思っていた」〈朝日:スピードスケート・高木美帆〉:北京冬季五輪で短距離から長距離まで5種目に挑戦し、4種目でメダルを獲得した。スピードスケートの世界は距離別の専門家が進む中、高木選手は「スケート界の大谷翔平」を選んだ。オールラウンドに育てることがトレンドか。